聖霊降臨後第22主日（特定25）　　2010/10/24

聖ルカによる福音書第18章9節～14節
　於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

今日の福音書は、先週に引き続き祈りがテーマになっています。先週は、気を落とさずに祈ることの大切さが、やもめと裁判官のたとえで語られました。今日は、その続きの箇所で、ファリサイ派の人と徴税人が登場するたとえです。片方は正しい人の代表者であり、もう一方は罪人や娼婦と共に、人々から軽蔑され社会的な差別の対象となっていた徴税人です。

この2人の祈りの態度と内容は、全く対照的です。ファリサイ派の人は、神殿で神さまの前に「進み出て」（岩波訳）、「得意そうに立ち」（詳訳聖書）、祈り始めます。ファリサイ派の面目躍如たる光景です。

ファリサイ派という名称は、もともと「分離する」という言葉から由来しているといわれます。自分たちを、一般の民衆から分離して、特別のグループを作って信仰生活を守った人たちでした。一般の民衆は、律法を完全に守りきることが出来ないために、汚れに染まりやすいのに対して、ファリサイ派は日常生活に於いて厳格に律法を守り、罪や汚れそのものから離れようとしました。

福音書の中でイエスさまが、このファリサイ派を「偽善者」と呼んでいるので（マルコ 7:6）、わたしたちは、ファリサイ派というと、律法の表面的な事柄にこだわって、重箱の隅をつつくようなことばかりを問題にして、律法の本来の精神を忘れてしまった人たちのように思い浮かべ勝ちです。しかし、ファリサイ派が律法を守ることにかけた情熱は、並大抵のものではありませんでした。

今日のファリサイ派の人のお祈りの中でも言っていますが、他の人とは違って人のものを盗み取ったり、不正を働くことも人を偽るようなこともなく、不倫に走るようなことも全くありません、と神さまの前に胸を張って堂々と申し述べることができるのです。律法の規定を厳密に解釈して、それに違反することは何一つありませんと言うのです。律法を守ることにおいて、ファリサイ派は優等生であることは間違いありません。

わたしたちも、「盗むなかれ」や「姦淫するなかれ」、「偽りの証しを立つるなかれ」など、これらの十戒の3つの戒めは、大概は守っていると自負できるかも知れません。それでは100パーセントすべて間違いなく守っているかと追及されると、人のものを盗んだり、姦淫を行うようなことはないかも知れないけれど、もしかしたら何か不正にあたることをしてしまったことがあるかも知れない。心ならずも偽りを言ってしまったことがないわけではないと、段々自信がなくなってくるかも知れません。人によっては、初めから「ごめんなさい、ファリサイ派には、到底太刀打ちできません」とシャッポを脱がざるを得ないかも知れません。

ファリサイ派が実行したことは、それだけではありませんでした。律法に決められている以上のことをしている、善行を積んでいると言うのです。それは、1つは、週に2回断食をしているということです。律法が要求している断食は、1年に1回だけでした。新年が始まって10日目は、「贖罪の日」と定められています。この日には

大祭司が至聖所に入って民の罪を告白し、犠牲の動物の血を祭壇に注ぎ、贖いの儀式を行いました。この日は、すべての民に断食することが求められ、労働を休み、祈りと聖書朗読、特に「ヨナ書」を読む習慣がありました（レビ 16:27～31, 23:27～32, 民数記 29:7～11、新共同訳聖書で「苦行」と訳されているのが断食のこと）。

それを、ファリサイ派は週2回、月曜日と木曜日に守ったのです。その自発的で積極的な行動は、民衆の中の罪を贖うことを願って行われるようになったということです。

更にもう1つ、献げ物について言えば、すべての収入の十分の一を捧げているというのですから、これも律法が要求している以上をお捧げしたのです。律法では、農作物の十分の一と家畜の初子を捧げることが規定されていますが（申命記 14:22～、レビ記 27:30～32）、ファリサイ派はそれを拡大解釈して、すべての収入の十分の一としたのです。今でもユダヤ教では、そのような習慣が守られているようです。そして、日本においては多くのプロテスタントの教会でも、同じように十分の一献金を捧げることが奨励されています（『教会生活の処方箋』）。このような献げ物が、どれだけ偉大な信仰の行為であるか、自分の献げ物の現実を振り返れば、よく分かることです。

ファリサイ派は、そのことを実行したのです。決められていたから、やむを得ず、そうしたのではありません。進んでそのように捧げたのです。それ程までに熱心であったのです。律法を守ることを通して、そこまで神さまに忠実であろうとしたのです。その忠実さにおいて、わたしたちの多くは、ファリサイ派の足下にも及ばないと言わざるを得ないのではないでしょうか。

しかし、イエスさまは、このファリサイ派を退けます。神さまに正しい者と認められ、受け入れられたのは、ファリサイ派の人ではなくて、徴税人だと言われるのです。

何故でしょうか。2つの理由が上げられると思います。1つは、ファリサイ派は、自分を正しい人間だとうぬぼれ、自認したからです。自分が神さまの前に正しい者とされる、それだけの値打ちが自分にはあると確信したのです。自分自身に頼ろうとしたのが、このファリサイ派の人の姿勢です。自分に頼るのであれば、神さまは要りません。ファリサイ派の人は、神さまに忠実であろうとして、全身全霊をそそぎ込んで律法の要求に応え、それ以上のことを実行しました。その結果は、皮肉なことに最も神さまから遠く離れて行ってしまったのです。神さまのお恵みに目を向けることをしなかったからです。

ファリサイ派が、イエスさまに正しい者と認められなかった第2の理由は、他の人を蔑むようになってしまったことです。これもまた、神さまのお恵みに気付かなかったことの結果です。

ファリサイ派の人に限らず、わたしたちは何時も、人の目が気になります。人と自分を比べたくなります。日常生活のあらゆる分野に於いて、このような誘惑が入り込んできます。そして人を羨んだり、自己満足に浸ったりします。そのような人との比較に関心を奪われている限り、わたしたちは自分のことを正しく見つめることが出来ないのです。相対的な世界の中で自分を肯定してみたり、他人をけなしたり、ひがんだりするだけなのです。そこでは、何時も誰かが一番になり、誰かがビリになりま

す。その尺度の中で、自分の位置を計って一喜一憂することによっては、自分の真の姿は見えてこないのです。ファリサイ派が正しいと認められなかったのは、そのような尺度に囚われてしまったからです。律法を守ることを、そのような物差しの事柄にすり替えて、神さまの絶対的なお恵みを見ようとしなかったからです。

他方、徴税人は、神殿で遠くの方に立つことしかできない自分を知っていました。目を神さまの方に向けることも出来ない自分であることを、つくづく感じていたのです。だから、彼の祈りはたった一つの言葉しかありませんでした。「神さま、罪人のわたしを憐れんでください」、その一言です。神さまの情けにすがるほかないことを知っていたのです。だから、お恵みを与えて下さいと祈ったのです。

徴税人という仕事の故に、律法に背く生活を送らざるを得ないのです。税の取り立てに於いて、人を偽ることもあったでしょう。必要以上にむさぼり取ることもしたことでしょう。ローマの手先となって税金を徴収することで、愛国的なユダヤ人の反感を強く買ったり、恨まれたりしたのです。罪人の代表的な存在として、救いの外にあるものと他人から後ろ指を指されるばかりではなく、自らも認めなければならなかったのです。自分を正しい者とすることなど、初めから叶わないことを知っていたのです。神さまの裁きの前には、ただただ頭を垂れるほかなかったのです。自分の前には滅びしかないのです。滅びを前にしてこの徴税人のできることは、神さまの憐れみを乞うことだけでした。

この徴税人の、神さまのお恵みによりすがる姿勢を、イエスさまは認められたのです。その態度が、神さまに受け入れられるものであることを、示されたのです。

「神よ、わたしを憐れんでください。」 これは詩編第51編の冒頭のみ言葉と同じです。詩編には、悔い改めの詩編が7つありますが、その中でも最も有名なのが51編です。その終わりに、「神よ、わたしの献げ物は砕かれた心　あなたは悔い改める心を見捨てられない」（祈祷書）とあります。神さまの前に、わたしたちは自分を義とする必要は全くありません。自分を繕って、何か価値のあるものであるかのように見せかける必要も、全くないのです。破れたままの姿で神さまに帰ることが、そのまま神さまに受け入れられることなのです。

信仰とは空っぽになることだ、という意味のことを言った人がいますが、わたしたちがチョットでも、自分で自分を正しい者としようとするときに、逆に神さまから遠く離れていくことになるのです。

神さまのお恵みだけに目を向け、そこにわたしたちの立つ根拠を見出すことができるように、わたしたちも砕かれた魂をお捧げする者でありたいと思います。